トーマスを育んだ国
～機関車トーマスと走る（中）～

高校を卒業するまで山口市で過ごした。自宅から市街地に行くにはJR山口線を横切らねばならない。また、中学校は山口線のすぐ近くにあったので、デゴイチ（D51）を見て育った。

にもかかわらず、機関車に全く関心を持たなかった。もっとも「機関車トーマスシリーズ」（汽車のえほんと呼ばれる）の第一話が英国で出版されたのは一九四五年のこと。それがアニメのテレビ番組となって日本でも放送されたのは一九九〇年以降である。だから私のような高齢者は小さいころ、トーマスの絵本やテレビ番組を知らなかった。

二〇一四年、この絵本が生まれた英国を二度訪れたが、二度とも「トーマス」の「ト」の字も考えなかった。特に二度目の英国中部の湖水地方を旅した時には、わずかな距離だが蒸気機関車に乗ったのに、考えもしなかったのは残念だが、知らなかったのだから仕方がない。

それが今、機関車トーマスに強い関心を持つことになったのは、長女が送ってくれた「機関車トーマスと英国鉄道遺産」を読んだからである。

英国国教会の牧師、ウィルバート・オードリーが書いた「機関車トーマス」は擬人化された機関車の空想の絵本だと思っていたが、「汽車のえほん」二十六冊に出てくる機関車や路線はほとんどが実存したものと知り驚く。

世界で初めて産業革命をなしとげ、その原動力の一つである蒸気機関車が英国各地で発達したという時代背景から、擬人化した機関車トーマスが生まれたのである。

そのことが克明に「機関車トーマスと英国鉄道遺産」の中に書かれている。

湖水地方を訪れた時、ウインダミア湖で遊覧船に乗る前のわずか十九分間、汽車に乗った。その時はJR山口線のSL山口号と同じように、観光列車と思った。確かに乗ったのは観光列車であるが、日本の場合とその経緯が違う。

英国には昔から走っていた鉄道を保存するために各地に「鉄道保存協会」が設立され、今でも百カ所以上の路線を鉄道遺産を保存するために蒸気機関車が走っている。

私が乗ったのもその一路線だ。保存活動は多くの場合、無償のボランティアによって支えられているという。そういえば昔のままの駅の鉄道関係者が高齢者であったことを思い出す。

彼らはボランティアで鉄道遺産を将来に残すことを誇りに思い、活動しているのだ。英国各地でこのように伝統の鉄道が守られていることは日本と全く違う。掲載の機関車の型がいろいろあるように、実際に各地で今も走っている機関車も違う。

鉄道に限らず、英国は伝統文化を大切にしていると二度の旅で実感した。機関車トーマスの絵本もこうした風土の中で生まれ、国民から親しまれ、愛されているのだろう。そして作者、オードリーの読み聞かせの中で育った息子によって、今も続編が書き続けられているのも素晴らしいことだ。

いろんな型の機関車が今も走る
＝汽車のえほんコレクションの表紙

湖水地方で乗った蒸気機関車